

吉田源十郎

《柘榴之図乾漆硯箱》



吉田源十郎(1896-1958)
《柘榴之図乾漆硯箱》

1926年
漆、蒔絵
高さ5.2、幅26.0、奥行28.8cm
平成25年度寄贈
撮影：アローアートワークス

漆

芸では、漆塗りの魅力とともにさまざまな加飾技法が作家の創作の心を表します。なかでも蒔絵は、日本において技術の開発と高度な洗練が達成され、写実的な自然の描写や文学的あるいは情緒的な表現において多様かつ特異な発展を遂げています。まさに、世界に冠たる日本の芸術文化を代表するに足るといっても過言ではないでしょう。

日本(ジバング)をイメージさせる金は、豪勢さだけでなく、強い光沢のうちに温かみや情緒的な感覚を備えて煌びやかな美しさを表します。蒔絵では、金の粒や金箔、薄い板(平文)に加え、ヤスリでおろした粗製の金粉を平らにした平目粉や、それをさらに丸めて各種の大きさにした丸粉や平粉など、それぞれの金粉の持ち味や光沢が活用され、精細で滑らかな文様表現やときには黄金の鏡面に迫るようなことも可能となっています。柵や机、手箱や硯箱等の箱もの、膳・椀等の食の器など、蒔絵の作家は、金をよく知りその効果をどのように表すかに自らの感性と創意を添わせます。

吉田源十郎(一八九六―一九五八)は、高知県生まれ、東京美術学校漆工科卒業。早々から農展や帝展、新文展、戦後の日展等で活躍しました。代表作に《漆南天棚》(一九三六年、京都国立近代美術館蔵)や、《小瑠璃図手筈》(一九五三年、東京藝術大学

大学美術館蔵)がありますが、現存するものとしては多くは知られていないようです。この《柘榴之図乾漆硯箱》は、大正時代末に金工の高村豊周や漆芸の山崎覺太郎、松田権六、染色の広川松五郎らと无型グループを結成し、伝統の旧弊を打破し新時代の工芸革新を訴えていわたるモダニズムの工芸を繰り広げた、気鋭の蒔絵作家として台頭した頃の吉田の重要な作品といえます。一九二六年、当時のもつとも権威ある美術団体であった日本美術協会が主催した第七十回美術展覧会に出品され、最高の推奨を受賞した作品です。

重量感をもたせた乾漆胎の被せ蓋の甲表から側面にかけて、高く盛り上げられた枝葉と六個の大きな柘榴の実が大胆な構図で配されています。全体にやや粗めの手触り感のある蒔絵金粉地とされ、柘榴の実の水で洗いながら刷毛で磨き出されておろし、金の光沢とマチエールが抑えられて下塗りの赤が斑に浮き出ています。果実の生き生きとした種衣の粒も赤々と清冽にして、いうならば柘榴の表象的な豊かな生命感を感じさせています。まさに、金の情緒に清新な感性を適合させた優品となっています。錫の覆輪、粗い梨子地とされた内部には硯と水滴が納められ、硯の下あたりに「源十郎作」と銘が朱描きされています。

(工芸課主任研究員 諸山正則)